見沼代用水路

－18世紀から21世紀へ・見沼代用水の恵みは永遠に－

「元圦附近鳥瞰図」(明治13年)

シンボルマーク

農業生産を左右する太陽の恵みを表す円を基に見の字を中心に改良区の管理する水を表す水紋を配したものです。

健康な水を守る
水土里ネット見沼代用水

見沼代用水土地改良区

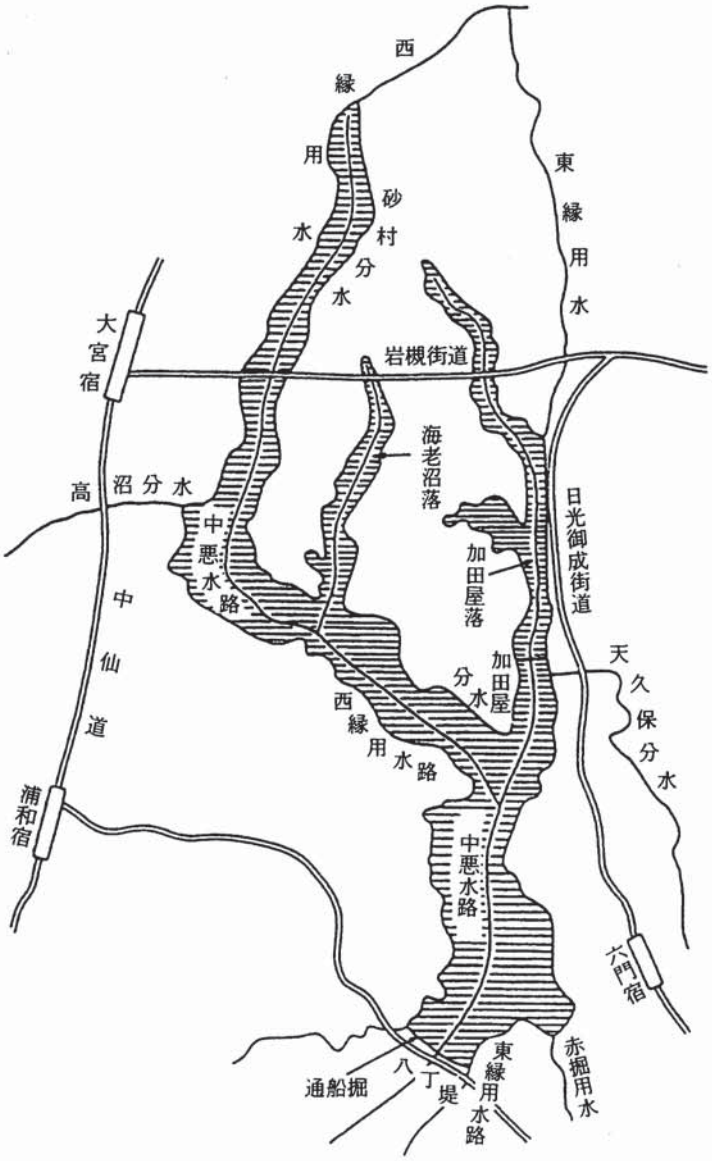
〒346－0106
久喜市菖蒲町菖蒲６５番地
●ＴＥＬ　(0480)85－9100(代)
●ＦＡＸ　(0480)85－9123
●E-mail　minuma@estate.ocn.ne.jp
●ホームページアドレス　http://www.minuma-daiyosui-lid.or.jp

見沼代用水路

1　見沼代用水の始り

見沼代用水路は利根川の水を利用し、見沼溜井（現さいたま市見沼たんぼ）を干拓するため、1728年に掘られた用水路で見沼の代りに掘られた水路と言う事で見沼代用水路と言います。

＜見沼のあったところ＞



見沼は、江戸時代の始め頃、さいたま市（旧浦和市、旧大宮市の東部）に広がった雨が降ると広がり、天気が続くとせまくなるような沼でした。

関東郡代伊奈忠治はこの沼の水を水田の用水とするために寛永年間（1624～1643）に木曽呂（きそろ）村（川口市）と付島（つきしま）村（さいたま市（旧浦和市））の間に堤（つつみ）をこしらえ沼の水をためる事としました。この堤は丁度八町（ちょう）（約900メートル）あった事から八丁堤（ちょうてい）と呼ばれる事となりました。この堤のおかげで周囲が40数キロメートル、水面積1,200ヘクタールの巨大な沼が出来、沼の下のさいたま市（旧浦和市）から東京都足立区までの約5,000ヘクタールの地域をかんが

いしていたと言われています。

その後約100年経った頃になりますと、見沼のかんがいする水田は沼の能力以上に開発され、かんがい時期には用水が不足し反対に大雨が降ると水があふれて水害となるようになりました。

徳川吉宗が八代将軍になった時、享保元年（1716）は幕府（武家時代に将軍が政治をしたところ）の財政は極端に悪く、吉宗は幕府の財政建て直しの為第一番に倹約をする事と、幕府の収入の増加をはかるため新田開発をすすめました。又、吉宗は紀伊（今の和歌山県）藩主の時、新田開発に手柄のあった井沢弥惣兵衛を享保８年（1723）に紀伊の国よりつれてきて幕府の役人としました。

井沢弥惣兵衛は享保10年（1725）新田開発の為、見沼を視察し沼を水田にし代りに利根川より水を引く事とし、翌年の享保11年10月現地に入り、享保12年８月から利根川の取入れ口より60キロメートルの用水路を掘り始め、同時に見沼を干拓するため、沼の底に水路を新しくつくり、この水路を芝川につなぎ荒川に流す工事もいっしょに行い、又、近くの村々に新田開発を呼びかけ享保13年（1728）春にはぜんぶ完了し新しい田が1,200ヘクタールも生まれました。見沼代用水路のおかげで新しく水田が出来ただけでなく、代用水路近くの水田も水に困らなくなり、近くのいくつかの沼も開発が進められ代用水路のかんがい面積は15,000ヘクタールを越えるようになりました。

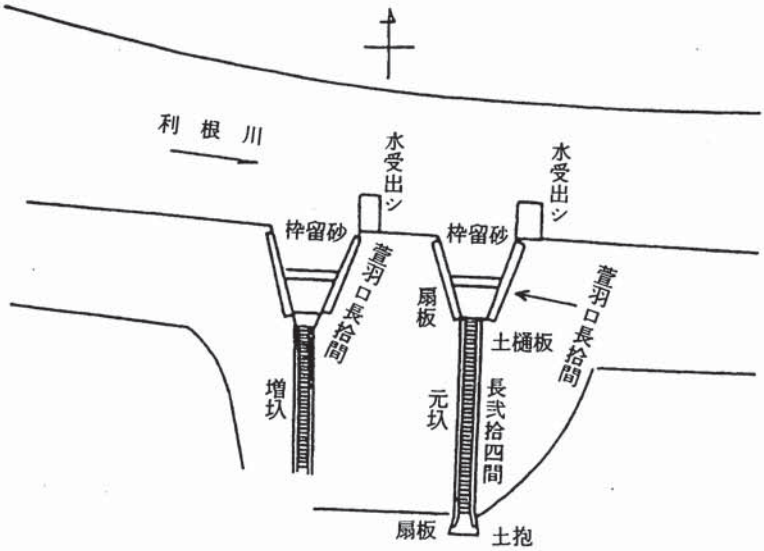
2　見沼代用水路

イ．取　入　れ　口（元圦）

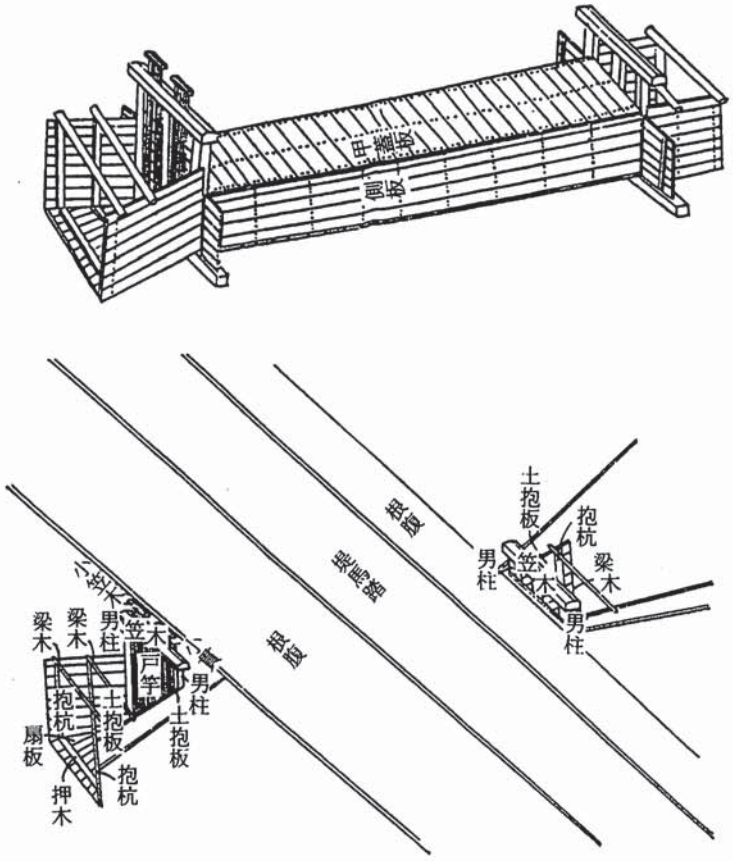
利根川からの用水の取入れ口は行田市大字下中条につくられましたが、この場所は、取入れ口が出来てから二百数十年利根川の流れがかわりなく堤防も一度もこわれた事がなく、水の取入れにもっとも適した場所で、昭和になってから利根大堰をつくるときもこの場所にきまりました。

取入れ口の大きさは長さ約44メートル、巾約3.6メートル、高さ約1.5メートルの木

平　面　図



取入れ口のかたち



造の取入れ水門をつくり、前には石でわくをつくり砂の入るのを防ぎました。

しかし、水の量が十分でなかったので翌年元圦の約45メートル上流に長さ約43メートル、内巾3.6メートル、高さ約1.2メートルの取入れ口を元圦にならってつくりました。

木造の取入れ口は大体20年ぐらいで作り替えをしていました。

明治39年（1906）木造より煉瓦（れんが）につくりなおしました。

昭和13年（1938）煉瓦づくりよりコンクリートにつくりなおしました。

昭和43年（1968）利根大堰がこの場所に新しくつくられ、取水が開始されました。

ロ．水　　路

元圦（もといり）から約2.5キロメートルは底巾約15メートル、上巾約25メートルの新しい水路をほり、星川に流しこみ、合流した場所から下流約17.1キロメートルは星川を利用し、途中昔から星川の水を取水していた新川用水（騎西領用水）や黒沼笠原沼用水そ

のほかの用水を分けて流し、菖蒲町上大崎に十六間堰・八間堰をつくり用水と川を分けました。その方法は用水の必要な時には八間堰を開いて十六間堰を閉め、用水がいらない時は反対に八間堰を閉め十六間堰を開いて水を下星川へ流すようにしました。

八間堰から下流は新しく水路を掘り（水路の大きさは土の良いところ悪いところで違いますが、下巾約11メートル、ふかさ約2.1メートル、上巾約20メートル）元荒川と交差するところは川の下をくぐり（柴山伏越）、綾瀬川と交差するところでは川の上をこしたり（瓦葺掛渡井）しました。この八間堰より瓦葺掛渡井までの約12.1キロメートルの工事はどうやって見沼の北のはじまで水を持ってきて、この工事を成功させるかの大事な仕事でした。

綾瀬川を渡ってから東縁用水路・西縁用水路に分れ見沼新田（見沼を開発した後に出来た水田）の東のへり・西のへりを通り八丁堤で今まで見沼溜井より水を取っていた水路につなぎました。

＜東縁用水路・西縁用水路〉

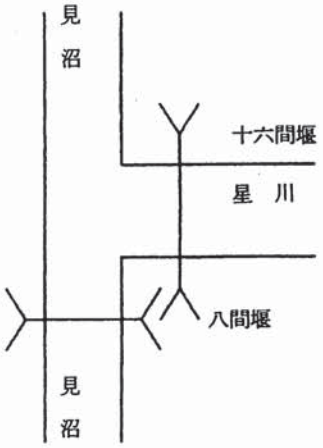
この二つの用水路は、見沼溜井干拓により開発された見沼新田と、代用水路をつくる前から見沼溜井の水を使っていた水田の用水としました。

東縁用水路は、巾７～11メートルの水路で瓦葺掛渡井から約16キロメートルの新しい水路を見沼の東のがけふちに造り、川口市の木曽呂橋で以前から使っていた水路につなぎ、西縁用水路は、巾5.4～９メートルで瓦葺掛渡井から約22キロメートルの新しい水路を見沼の西のがけふちに造り、さいたま市（旧浦和市）付島橋で以前から使っていた水路につなぎました。

ハ. おもな施設

① 十六間堰・八間堰

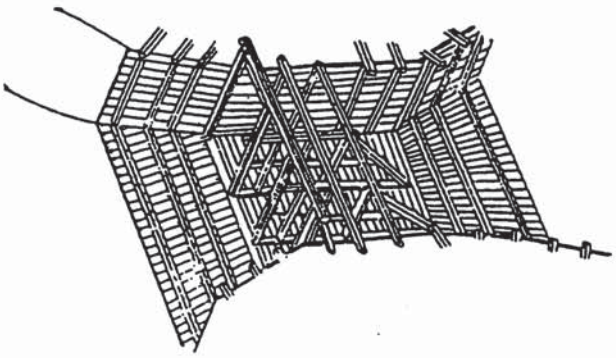
星川から菖蒲町で分れて新しく掘った代用水路の入り口に八間堰を、星川に十六間堰を作り用水排水のちょうせつを行いました。



八間堰は横八間（約14.5メートル）、高さ約2.4メートル、長さ約7.2メートルの木造の堰で、堰の上には浮き上がらないように土橋をかけました。

十六間堰は横十六間（約29メートル）、高さ約2.4メートル、長さ約11メートルの木造の堰でこの上にも土橋をかけました。

堰のかたち



両方の堰は代用水路の中でももっとも重要な堰で、用水のひつような時には十六間堰を閉じて八間堰を開き、新しい水路に水を送り用水のいらない時は反対に八間堰を閉じて十六間堰を開き星川に水を流しました。

○両方の堰とも木造の時は十数度のつくりかえやしゅうぜんをしました。

○大正３年（1914）八間堰を木造より石につくりかえました。

○昭和29年（1954）十六間堰を木造よりコンクリートにつくりかえました。

○昭和34年（1959）八間堰を石造よりコンクリートにつくりかえました。

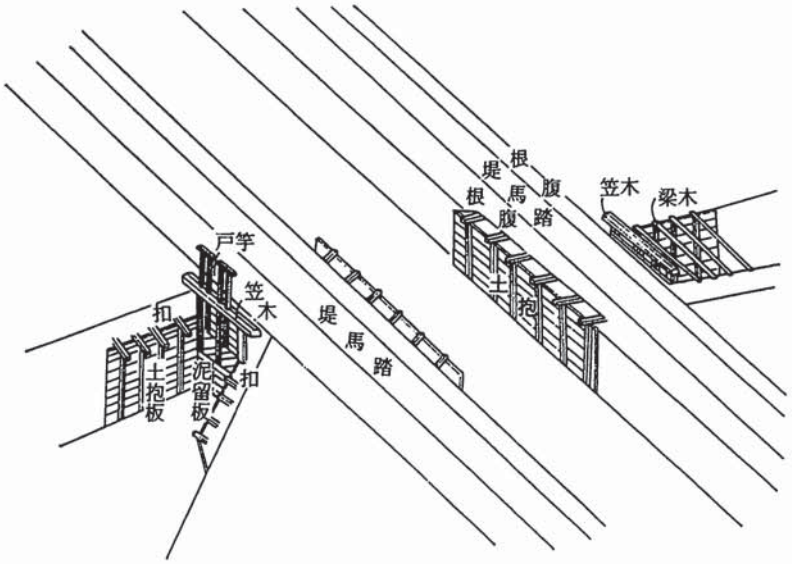
○埼玉合口二期事業（昭和53年～平成７年）により両方の堰とも現在の形につくりかえました。

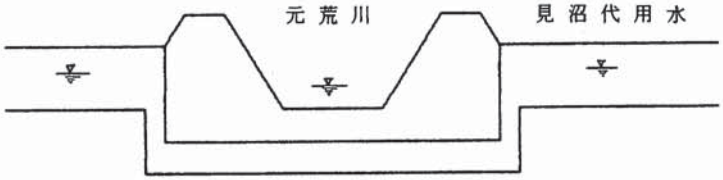
② 柴 山 伏 越

柴山伏越は見沼代用水が元荒川と交差する白岡町と蓮田市のさかいにあります。享保12年出来た当時は、水を二つに分けて伏越と掛渡井で通水するようになっていました。伏越は長さ約47メートル、内巾約4.2メートル、高さ約1.2メートルで平地より5.4メートル低い元荒川の川底の下に作り、上に土橋を作り浮き上がらないようにしました。

掛渡井は長さ約47メートル、内巾約3.6メートル、高さ約1.8メートルでしたが、元荒川の流れのじゃまになったので宝暦（ほうれき）10年（1760）長さ約47メートル、内巾約3.6

伏　　越





メートル、高さ約90センチの伏越としました。

○木でつくられていた時は大体十年ぐらいで修繕が行われていました。

○明治20年（1887）木造（もくぞう）より煉瓦（れんが）につくりかえました。

○昭和３年（1928）コンクリートにつくりかえました。

○埼玉合口二期事業（昭和53年～平成７年）により現在の形につくりかえました。

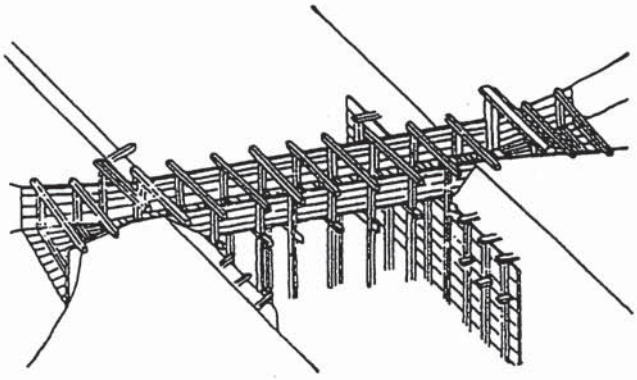
③　瓦葺掛渡井

見沼代用水路は蓮田市と上尾市のさかいで綾瀬川の上を長さ約50メートル、内巾約7.2メートル、高さ約1.8メートルの木造の掛渡井で渡しました。この掛渡井は木造の為ほとんど10年以内でかけかえが必要で修理は毎年のように行われたようです。

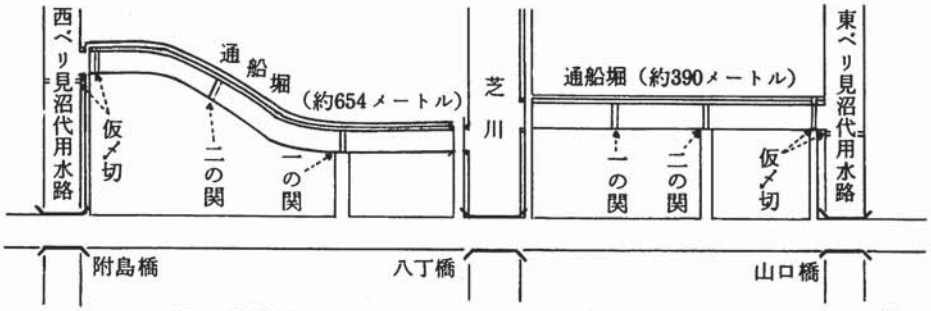
○明治40年（1907）木造より鉄製につくりかえました。

○昭和36年（1961）掛渡井よりコンクリートの伏越につくりかえました。

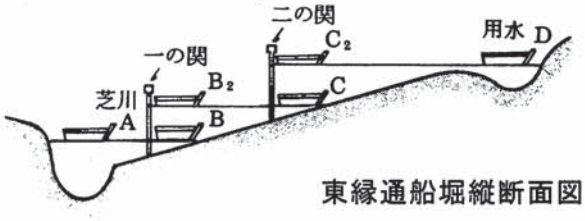
掛　渡　井



④ 通船堀



見沼通船堀平面図



東縁通船堀縦断面図

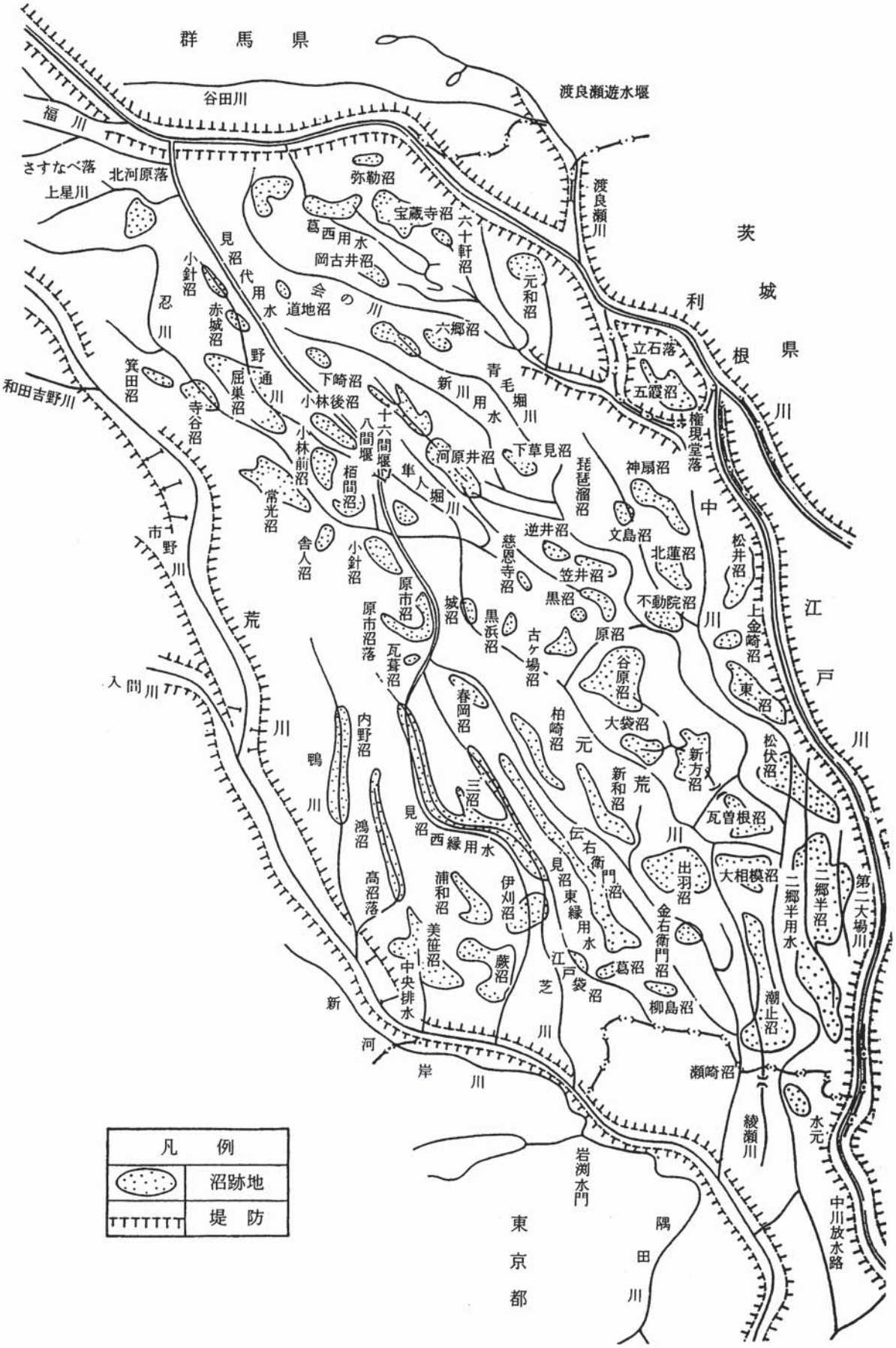
見沼代用水路が完成した享保13年から３年後の享保16年（1731）芝川と東縁・西縁用水路の間に、さいたま市（旧浦和市）の八丁堤にそって通船堀（閘門式運河）を作りました。この通船堀は用水路と芝川の水の高さが３メートルあるので、用水路と芝川の間に二つの水門を作り水門の間に水を入れ水の高さをちょうせつして船を通す仕組で日本で一番古い閘門式運河です。

この通船堀が出来たため代用水路は舟運にも利用され江戸への年貢米や野菜などを運び、江戸から肥料や日用品その他を運びました。通船は昭和６年（1931）まで約200年続けられ、今この堀のあとは国の文化財として指定されています。

二. 開発されたおもな沼

代用水が出来たため、見沼の他多くの沼の開発が行われ新しい水田となりました。そのおもなものは次のとおりです。

○小針沼（行田市）　○屈巣沼（鴻巣市(旧川里町)）　○小林沼（菖蒲町）
○栢間市（菖蒲町）　○柴山沼・皿沼（白岡町）
○河原井沼（菖蒲町・白岡町・久喜市）　○笠原沼（宮代町・白岡町）
○黒沼（春日部市・さいたま市(旧岩槻市)）
○鶴巻沼(深作沼)（さいたま市(旧大宮市)）
○高沼（与野市・さいたま市(旧浦和市)）　等


群馬県
谷田川
福川
さすなべ落
北河原落
上星川
渡良瀬遊水堰
渡良瀬川
茨城県
利根川
弥勒沼
宝蔵寺沼
六十軒沼
葛西用水
岡古井沼
見沼代用水
会の川
道地沼
小針沼
赤城沼
忍川
箕田沼
寺谷沼
屈巣沼
野通川
和田吉野川
元和沼
六郷沼
立石落
五霞沼
権現堂落
青毛堀川
新川用水
下崎沼
小林後沼
十六間堰
八間堰
小林前沼
栢間沼
常光沼
舎人沼
舎人堀川
河原井沼
下草見沼
琵琶溜沼
神扇沼
文島沼
逆井沼
慈恩寺沼
笠井沼
黒沼
北蓮沼
不動院沼
松井沼
中川
江戸川
市野川
荒川
入間川
小針沼
原市沼
原市沼落
城沼
黒浜沼
古ケ場沼
原沼
谷原沼
上金崎沼
東沼
瓦葺沼
春岡沼
柏崎沼
大袋沼
新方沼
松伏沼
内野沼
鴨川
三沼
新和沼
元荒川
瓦曽根沼
鴻沼
見沼西縁用水
伝右衛門沼
出羽沼
大相模沼
二郷半用水
二郷半沼
第二大場川
高沼落
浦和沼
伊刈沼
見沼東縁用水
金右衛門沼
美笹沼
蕨沼
中央排水
江戸袋沼
葛沼
柳島沼
潮止沼
新河岸川
芝川
瀬崎沼
綾瀬川
水元
岩渕水門
中川放水路
東京都
隅田川
凡例
沼跡地
堤防

ホ．おもな支線水路

1．騎西領用水路（新川用水路）

この用水路は、代用水路が出来る前から星川を水源としていた長さ約20キロメートルもある代用水最大の支線用水路です。

2．黒沼笠原沼用水路（中島用水路）

この用水路は、享保13年井沢弥惣兵衛により開発された黒沼笠原沼の代りの水路として新しく作られた水路です。

3．高沼用水路

高沼の代りの水路として新しく作られた水路です。

へ．代用水路の維持管理

① 徳川幕府時代

見沼代用水のかんがい区域は幕府の直轄領や大名・旗本などの土地が複雑に入り組んでいたため、江戸時代には幕府が直接管理していました。毎年４月から９月にかけての用水の時期には幕府より水配掛や御普請役が江戸から派遣されて用水を公平にくばることや水路などの修理などの管理をしていました。

② 明治維新以後

明治元年幕府がなくなり水配掛が居なくなったため、新政府の民部省土木司が管理しました。

明治２年……忍藩・浦和県・小菅県が分割して管理しました。

明治４年……廃藩置県によって埼玉県の管理となりました。

明治14年……見沼代用水聯合集会（土地を所有している水路の関係者からえらばれた議員による会議。管理者は、埼玉県北埼玉郡長・同南埼玉郡長・同北足立新座郡長・東京都南足立郡長が水路を区分して管理）が管理の方法を決めて管理しました。

明治18年……見沼代用水路土功会が発足（北足立新座郡長が管理）しました。

明治37年……見沼代用水路普通水利組合発足（北足立郡長が管理者《大正15年郡役所廃止まで》その後は埼玉県管理）しました。

昭和27年……見沼代用水路土地改良区が発足（昭和32年見沼代用水土地改良区に名称変更、昭和43年見沼土地改良区に名称変更、平成15年見沼代用水土地改良区に名称変更）し、組合による管理となりました。

ト. 見　沼　通　船

通船堀が使用されるのは用水が不用となる９月から翌年の２月まででしたが、この時期は作物の収穫の時でもあるので年貢米の輸送等に大きな役割を果たしました。

享保16年（1731）の通船開始当時は代用水は綾瀬川、元荒川とも掛渡井で渡っていたため元圦地点まで舟がとおっていましたが、元荒川の出水のたびに掛渡井が流されたため宝暦10年（1760）柴山地点は伏越だけとなったため、通船は柴山伏越の下流からとなりましたが物資輸送の大きな手助けとなりました。

しかし、明治時代になりますと鉄道が高崎線・東北線と開通し、道路の整備も進み、だんだんと荷物が少なくなり昭和６年（1931）に200年間行われた見沼通船は終了しました。